

## 論文

## 佐野常民と「博愛」：思想と行動への発達心理学的視点を交えた考察

三島 正英  
Masahide MISHIMA

博愛社、日本赤十字社の創設者である佐野常民はいかにして「博愛精神」を形成していったのであろうか。本稿は、経歴を辿ることから佐野が博愛社、日本赤十字社創設に至る背景を検討することを主な目的とした。幼少期の体験、儒学の影響、蘭学・洋学の研鑽、そして洋行経験などの検討をとおして、佐野が日本の近代化に向けて博愛・赤十字事業に向かった背景を明らかにすることを先ず試みた。つづいて、佐野の思想や行動が、明治という近代化に向けた新体制の中で「図」と「地」の関係で絡まり合っている様相を考察した。また、赤十字活動という西洋思想を我が国社会に導入するにあたって用いた「博愛」という概念について考察し、佐野自身の思想と行動は、儒学の影響を強く受けたものであるとともに、佐野自身が儒学にもとづく行動を貫きつづけた存在であることなどについて論及した。

キーワード：佐野常民、博愛、赤十字活動、儒学、近代化

## はじめに

佐野常民<sup>1</sup>は、日本赤十字社の創設者として知られている。西南戦争さなかの明治10(1877)年4月、元老院議員であった佐野は、同じく議員であった大給恒とともに「博愛社設立願書」を右大臣岩倉具視に提出した(日本赤十字社、1919; 吉川、2001)。この願いは直ちに聞き届けられることはなかったが、佐野はひるまず願いをづけ、三度目にしてはじめて官軍征討総督有栖川宮によって許可が与えられるとともに、博愛社の救護活動が開始された(黒沢、2011; 吉川、2001)。

博愛社の設立が直ちに認可されなかったこと理由は、「博愛社設立願書」と共に提出された「博愛社社則」の中に、「敵人傷者と雖も、救得べき

ものは是を収むべし」(社則第四条; 日本赤十字社、1910による)とあるように、敵味方なく救護するという理念が当時においてはまだ理解されなかったことがあげられている(河村、1971; 黒沢、2009; 吉川、2001)。

幕藩体制が終焉を迎え、欧米列強に肩を並べること国是としたその後の富国強兵、文明開化の時代の潮流を前にしてなお、新政府に抗する「敵」は「賊軍」であり、「賊」に情けは無用であり、したがって「捕虜」の概念すらなかった時代である(例えば、日本史籍協会編、「高松凌雲翁経歴談」、2013)。そのような時代にあって、どのようにして佐野は「博愛」の精神を自らの中に形造り、そしてそれを唱え実践へと突き進むようになって

\* 1 佐野常民は、その生涯に於いて何度か改名しているが、本稿ではいずれの時代にあっても「佐野常民」と表記する。

いったのであろうか。黒沢 (2009) は、博愛社創設 (そしてその後の日本赤十字社の創設と運営) にあたってはいくつかの要因が重なり合って成立したことを検証している。そこで「主旋律」となったのは佐野常民であり、佐野が果たした役割が検証されている。

では、佐野自身はいかにして「博愛」精神を身につけ、実際に行動を起こす人格を築き上げていったのだろうか。この問いに関しては、佐野にかかわる各種の評伝 (例えば、川副町教育委員会、1988; 北島、1928) を始め、日本赤十字社研究の文脈の中でさまざまに触れられてきた (黒沢・河合、2009; 日本赤十字社; 1912、1919; 佐久間、2012; 吉川、2001)。だがその多くは、佐野の博愛社創設に始まる一連の活動を所与のものとし、「博愛」が意味する内容への検討を含め、そこに至った佐野自身の発達の背景についてはさらなる検討が待たれる課題となっている。おそらくそこには、佐野自身の持って生まれた資質や性癖とともに、佐野を取り巻くさまざまな人々からの影響や、開国という時代のうねりが及ぼす抗い難い価値観の変動を間近に経験したことなどが相互に入り組んで、佐野の「博愛精神」形成に大きな影響を及ぼしたことが窺われる。

本稿は、佐野常民がいかにして「博愛精神」を形成したのかについて検討することを第一の目的とした。今日、人権は国家の枠を超えた普遍的価値として守るべきものとなっているが、佐野の提起した「博愛」とは、当時においていかなるものを意味し、そしていかにして佐野の中に形成されていったのであろうか。それらを明らかにするために、佐野の出生から博愛社創設までの主要な経歴を辿りながら、「博愛精神」形成に影響を及ぼしたと考えられる出来事や要因について確認していくことをまず試みた。

ところで近年の発達心理学は、近接諸科学との相互の連携のもとに発達科学としての新たな歩みを踏み出し始めてきている (例えば Lerner, 2006; 三島、2013)。そこでは、生得的背景を始めとする固有の背景を持つ個体 (individual) が、

それを取り巻く社会的、文化的、歴史的な脈絡 (context) との間に相互に入れ子のように影響を及ぼしあいながら個人の成長発達が推し進められていく発達モデルが仮定されている。とりわけ個体が成長発達していく時代的背景は、個体発達との間でいわば図 (figure) と地 (ground) の関係に例えられるように直接・間接の影響を互いに及ぼしあうことが想定される。

これらのことをふまえて本稿では、博愛社創設をめぐる佐野常民の心情についての考察を加えることを第2の目的とした。佐野常民をモデルにこの検討を行う意義は、幕藩・鎖国体制から新政府・開国体制へと社会が大きく移り変わる中で、佐野の思想や行動は、きわめて象徴的に当時の時代の変化の影響を受けると共に、また反転して佐野の思想や行動が、社会へと反響していく具体的事例を顕著に現しているように思われるからである。

佐野の評伝や伝記はさまざまに発表されているが、それらの資料に基づきながら、佐野が「博愛精神」を形成するに至った過程とそれを促した要因への考察、さらには個人の思想や行動が歴史・文化的状況のなかでいかに相互に作用しあうのかの一端を浮き彫りにできれば幸いである。

## 1 幼少期の佐野常民

佐野常民は、文政5 (1822) 年十二月、肥前国佐賀郡早津江 (現在の佐賀市早津江) において佐賀藩士・下村充賛の五男として出生した (日本赤十字社、1919 他)。幼名は鱗三郎。出生地の早津江は佐賀城下まで約2里ほどの地である。筑後川が有明海に注ぐ河口にあり、空が大きく広がる古くから開けた地であった。秦の始皇帝が不老長寿の薬草を探すために派遣した除福が上陸したという伝説が残る寺井津浮盃に近く、生家の目の前には航海と漁の安全を護る志賀神社の社が今でも堂々とした姿を見せている。実父の充賛は、佐賀藩の会計方に出仕した武士であり、とりわけ、幕末の佐賀鍋島藩の財政危機を回避すべく、大阪で豪商相手に藩の債務処理に辣腕をふるう能吏として佐野常民の伝記に紹介される人物であった (本間、

1943；川副町教育委員会、1988)。また財政立て直しに向け、藩の一切の諸礼、諸式を廃すなどの辣腕をふるうと共に、儒家としての素養を有していたことも伝えられている。

常民は、そのような家庭環境の下で、儒教と「葉隠」精神に基づく厳しい躰のなかで育つ（百瀬、1989）とともに、雄大な筑後有明の自然を友に小魚釣りや貝拾い、蛭狩りなどに興じるふつうの子どもとして日々を過ごしていたことが描かれている（本間、1943；國、2013）。

文政11（1828）年、常民6歳の時、当地を台風が襲った（子年の大風）。河口に広がる低地であったことも相まって、多数の被害者が出たと伝えられるが、幼少期の常民にとって死を間近に経験するとともに、悲惨な状況への援助という課題の原点をそこにみることもできる（吉川、2002）。

その後、天保3（1832）年、常民は藩医・佐野常微（儒仙）の養子となる。養父常微は藩主・鍋島直斉に仕える医師であった。天保5（1834）年、藩校弘道館の外生となり、翌年には内生となることが許されていることから、類を見ない優秀さを示したことが評伝に描かれている（本間、1943；川副町教育委員会、1988）。だが当時の佐野常民には、藩校での姿とは別の顔も窺われている。國（2013）は、明治25（1892）年5月16日付けの読売新聞に掲載された明治紳士録に、佐野が幼少期の養家における扱いに涙する姿を紹介している。そこでは、狎より下等におかれた往時の思い出に涙する明治の重臣として紹介されている（読売新聞社、CD-ROM版による）。この涙の理由は明らかではないが、医家佐野儒仙は、当時、書生7名を抱える医学塾であり（杉谷、1992）、また後に妻となる駒子も養女として共に暮らしていた。そのようななかでは、養子である常民への期待が大きく厳しいものであったことが想像される。少年常民は、その期待に添うべく、そしてそうすることが生家へのなによりの孝であるともいうかのように、血のにじむような努力をしていたことが想像される。そのことが晩年の狎のエピ

ソードの涙の訳とも解釈できる。養家への思いと生家へのそれとの狭間のなかで、少年期の常民が精一杯の努力をつづけつつも、儒仙が江戸に出向している間は早津江の生家から弘道館に通っていたとも伝えられており、生家との心情的な繋がりは堅く結ばれていたと推測される。

そのような折のひとつのエピソードが伝えられている。常民が佐野家に養子に入った天保3年、実父充贄が舌疽を病み寝込んでしまった折りのことである。常民の27歳になる兄芳充は、藩が困窮している状況の中、父なくしては藩の立て直しも叶わずと父の病氣快癒を祈り、厳冬期に佐賀から5里ほど離れた小城の清水の滝まで出かけて水ごりを行ったが、そのことがもとで兄は死に至ったことが伝えられている。人々は後に「此父アリ此兄アリ」と下村父子を評したという（日本赤十字社、1912）。養子に出た後の常民はそのことを知らず、後に母親から聞かされたという。

幼少期から少年期にかけてのこれらのエピソードからは、父親を家長として構成され、儒教を家族統合の原理とする家族像が浮かんでくる。とりわけ特徴的なのは、母親についての記述が一連の伝記や評伝のいずれにも一切見あたらないことである。このことは儒教的家風の中で、当時の女性が置かれていた地位を典型的に示すものとみることができる。おそらく佐野の母親は、家内にあって「慈母」という役割を果たしていたことが想像される。佐野常民は、このような家族の下で生得的資質と共にそのような両親によって創られる養育環境の中で育っていった。

## 2 儒学

佐野常民は、天保5（1834）年、藩校である弘道館に入学した。弘道館は天明2（1782）年、8代藩主鍋島治茂によって創設されているが、幕藩体制は統治の根本原理に朱子学を中心とする儒学を据えたことから、弘道館に於いても朱子学を中心とする儒学が先ず講じられていた（福岡、2005）。加えて佐賀藩においては、「鍋島論語」ともよばれる「葉隠」が鍋島武士の心得として教授されて

おり、なかでも「葉隠4 誓願」(奈良本,1969)は、その後の佐野常民の行動を検証する上で少なからぬ影響を及ぼしたことが推測できる。とりわけ「大慈悲を起こし人の為になる可き事」という一項は、後の博愛社設立に向けた伏線となったとみることもできよう(本間,1943)。ただし、幕末の佐賀藩においては、10代藩主鍋島直正(閑叟)によって弘道館の教育内容への大幅な改革が加えられ、なかでも和学、漢学に加え洋学(蘭学)が多いに奨励されることとなる。また「葉隠」についても大隈重信がその偏狭さを非難する時代となっていくが(奈良本,1969)、佐野は大隈より16歳年長であり、当時の佐野は儒学を中心とした学修に「才の人」として邁進していた(本間,1943)とみることができる。

天保9(1838)年には養父に従い江戸に上り、翌年には昌平坂学問所の教授を務める儒学者古賀侗庵の塾に入っている。侗庵は儒学者であるとともに、ロシアやイギリスなどの列強が東洋へと進出してくる情勢を冷静に分析し、すでに開国論を主張していた学者であった(福岡,2005)。したがって佐野常民は、古賀侗庵のもとで当代一流の儒学を学ぶと共に、後の開明的視野の一端を開く機会を得たと見ることができる(同上)。

これらのこととも相まって、佐野常民は生涯の主君となる直正(閑叟)の意を受け、次項に見るように佐賀藩の藩政改革の一翼を担うべく医学をはじめとする蘭学、洋学の最新知識の導入に重要な役割を果たしていくこととなる。しかし、佐野常民にとっての儒学は、生家の影響とも相俟って、少年期に受けた影響が、その後の思想と行動形成に永続的な影響を与えたことを窺わせている。例えば、佐野常民の名を今日あらしめるに至った「博愛社」の名称は、韓愈の「原道」に出てくる「博愛之謂仁(博愛これを仁と謂う)」に由来する(吉川,2001)ことにもその一端を見ることができる。

ところで、「博愛」とは儒学の系譜の中でどのような概念として扱われ、また意義づけられてきたのであろうか。このことの理解こそが、佐野の思想と行動形成過程を理解するひとつの鍵とな

る。そこで、「博愛」をめぐる儒学思想の一端についての検証を試みてみたい。

最初に、「博愛」の語源をどこに求めることができるのかからみてみよう。「漢語大詞典」(漢語大詞典編集委員会・漢語大詞典編纂所,1986)および「大漢和辞典」(諸橋,1986)は、ともに「博愛」の初出を曾子の「孝教」三才章に求めている。また中国のWEBサイト「中国哲學書電子化計画」での検索結果も同様の結果を示している。

「孝教」とは孔子が弟子の曾子に「孝」の道を説いた書であり、竹内・坂本(1940)による「三才章」の訳注に従う冒頭の文は以下のとおりである。

「曾子曰く、甚だしきかな孝の大なるや。子曰く、夫れ孝は天の経なり、地の義なり、民の行なり。天地の経にして民乃ち之に則る。〔先王〕は天の明に則り、地の利に因り、以て天下を順<sup>おし</sup>ふ。是の故に其の教え肅<sup>きび</sup>しからずして成り、其の政厳しからずして治まる。先王は教えの以て民を化す可きを見る。是の故に之(民)を先に博愛<sup>みちびく</sup>を以てして、民其の親<sup>わす</sup>を遺<sup>わす</sup>るるなし、之(民)に説くに徳義を以てして、民興<sup>よろこ</sup>び行ふ、之(民)を先くに敬讓を以てして、民争わず、之(民)を導くに禮樂を以てして、民和睦す。之(民)に示すに好悪を以てして民禁を知る。詩に云ふ、「赫赫たる師尹、民具爾を瞻る」と(竹内・坂本,1940, p.23-24 一部当用漢字に変換。下線は筆者による。)

ここでは「孝」による統治の利が説かれるとともに、「太陽と北風」に例えるならば、ひろく分け隔てなく愛する「博愛」という太陽を以て民を導く大切さが説かれている。

つづいて、韓愈の「原道」のなかで触れられている「博愛」についてみてみよう。「原道」とは、「道の本源<sup>たづ</sup>を原ねる」意とされ(笠松,1934)、冒頭は以下の書き出しから始まっている。

「博く愛するこれを仁と謂い、行<sup>よろ</sup>いて宜しうする、これを義と謂い、是に由りて之く、これを道

と謂い、己に足りて外に待つこと無きをこれ徳と謂う。仁と義とは定まれる名有り。道と徳とは虚しき位有り。故に道に君子小人有りて、徳に凶有り吉有り。(以下略) (清水、1956 p220)

上記のように「原道」の書き出しは仁義道徳の定義から始められている。ここでとりわけ注目されるのは、“人道主義だといってもよい” (清水、1956) とされる「博愛」の定義とともに、「義」の定義として、適宜の行動をとる事があげられていることである。清水 (1956) によれば、「義」とは、その場その場にふさわしいなすべき事をする、いわばゾレン (当為: sollen) と解釈されるものであり、とりわけ儒教では、実行することが大事であり、議論が知的遊戯に終わってはならないことが強調されている。

これらのことは、佐野が、博愛社の設立そしてその後の展開に向けた一連の行動を展開していくうえで、「博愛」の理念とともに、理念実現に向けての行動の指針を韓愈の原道をはじめとする儒学思想の中から学び取って実践していることを如実に示している。

さらに、「中庸」についてもみておこう。日本赤十字社發達史 (1910) には、明治35 (1902) 年の佐野の薨去を悼む追悼文が掲載されている。そのなかで生前の佐野は「中庸」を深く愛読していたことが紹介されている。なかでも「人一能之己百之、人十能之己千之、果能此道矣、愚雖必明、雖柔必強」(人十たびしてこれを能くすれば、己はこれを千たびす。果たして此の道を能くすれば、愚なりと雖も必ず明らかに、柔なりと雖も必ず強からん) (金谷、1998) の一句は、佐野の「終身の本尊」(日本赤十字社、1910) として折りある度に引用、揮毫していたことが伝えられている。このエピソードは佐野が折々に見せたことされる所信への屈することのない固持(日本赤十字社、1919) や、盟友大給恒や大隈重信の佐野への人物評(川副町教育委員会、1988) とも重なり、“佐野の実行力”(百瀬、1989) の源となっていたと見ることができる。

また「中庸」には、「仁とは人なり」という記述も見ることができる。「中庸」は「人間の本性とはなにか」を論じるとともに“誠”の哲学を説く書であることが指摘されている(金谷、1989)。「誠」は「天の道」であり、「天命」の徳として人の本性となっているものとして扱われているが、「中庸」の徳は、性善思想の帰結として、この高貴な本性としての「誠」に基づいてこそ完成されるとされている(金谷、1989)。前出の「日本赤十字社發達史」(日本赤十字社、1910) は、佐野の行動を指して「至誠の致す所」と評しているが、その背景には「中庸」の実践があったと見ることができよう。

### 3 蘭学・洋学

天保10 (1839) 年、佐賀藩主斉直の死去に伴い、養父とともに佐野常民は佐賀に戻っている。佐野常民は弘道館で学ぶ傍ら、外科医としての修行を行っていたが、後を継いだ鍋島直正(閑叟) は、藩政改革に乗り出し、とりわけ藩内の人材育成に向けて有為の青年を各地に派遣した(國、2013; 吉川、2001)。佐野の才能は直正の目に留まり、常民は弘化3 (1846) 年、京都の蘭学者廣瀬元恭の時習堂に入門し、嘉永元 (1848) 年には大阪の緒方洪庵の適塾へ、さらに紀州の華岡青洲の春林軒塾、そして翌嘉永2 (1849) 年には江戸の伊藤玄朴の象先堂で蘭学を学んでいる。これら当代きっての学者の下での研鑽のなかで特筆すべきは、蘭学、洋学の研鑽が藩政改革に邁進する藩主直正からの強い要請に基づくものであるとともに、その藩主の要請に応じようとする佐野の誠実な研鑽と成果の達成が認められることである(本間、1843)。河村(1971) は、佐野の評伝の中で、“直正は佐野を愛しており、また佐野もそのことを身に染みて感じており、権謀術数がうずまく革命の時代にあって幸福な主従であった”と評している。

また、佐野の蘭学修行の中で特筆すべきは、大阪の適塾での経験である。佐野は第132番目の入塾生であったが(佐野常民記念館、2004; 梅溪、

1996)、時の塾頭は村田蔵六（大村益次郎）であった。なお、村田亡き後は、その誼で村田の家族の面倒をみているが、生涯をとおして人との繋がり  
の厚さがあったことの一部を、この事例にかいま  
見ることでもできる（本間、1843）。

さて適塾は、当初、医学塾として出発したが、  
ペリー来航をはじめとする騒然とした国情を前  
に、洪庵は“医業を措き、当今に必要な西洋学者  
の育成を旨としている”との書簡を甥に送ってい  
る（梅溪、1996）。福沢諭吉も「福翁自伝」（松沢、  
2011）のなかで“緒方の塾風”について触れ、自  
由闊達な塾生同士の相互の錬磨の中で、医学に限  
らず、西洋日進の書を読む事への自負と楽しみに  
ついて触れている。

佐野の「博愛社」創立との関連から見たとき、  
特筆すべきこととして、「医は仁術」をモットー  
とした緒方洪庵による薫陶があげられている（百  
瀬、1989；吉川、2001）。洪庵は、ドイツ人医師  
フーフエランドの蘭語訳医学書を「扶氏経験遺訓」  
として翻訳するとともに、巻末の「医師の義務」  
と題された付録の一遍を抄訳し、「扶氏医戒の略」  
として安政4（1857）年に出版している（緒方  
1963；梅溪、1996）。その内容は12条からなる抄  
訳の体裁をとっているとはいえ、洪庵自身の思想  
の著述と見るべきものであるとされている（緒方、  
1963）。以下に、「扶氏医戒の略」のなかで、とり  
わけ、博愛社、赤十字活動との連関が窺われる条  
項を以下にあげておこう。

「扶氏医戒の略」抄（梅溪、1996 一部現代仮  
名遣いに改変）

・病者に対しては唯病者を視るべし。貴賤貧富  
を顧みる事なかれ・・・

・不治の病者も仍ち其の艱苦を寛解し、其の生  
命を保全せんことを求むるは、医の職務なり。棄  
てて省みざるは人道に反す。たとひ救うこと能わ  
ざるも、之を慰するは仁術なり・・・

・病者の費用少なからんことを思ふべし・・・

「扶氏医戒の略」が出版された頃には、すでに

佐野は退塾し、京都の時習堂で知り合った中村喜  
助、田中儀右衛門父子ら科学技術者を伴って佐賀  
藩での新たな技術開拓に邁進していた。したがっ  
て「扶氏医戒の略」を洪庵から直接教授されたか  
否かについては不明である。しかし、洪庵の「医  
は仁術」という思想は十分に感得していたと見る  
ことができる。また、緒方洪庵家族とはその後も  
親交がつづいていたことが「福翁自伝」（松沢、  
2011）に認められるのみならず、洪庵婦人・八重  
の墓碑銘は佐野が撰している（緒方、1963）こと  
など、洪庵から受けた影響は大きなものであった  
ことが推測できる。

なお、我が国での最初の赤十字精神の実践者と  
評価される高松凌雲は、文久元（1861）年に入塾  
しており（百瀬、1989）、その後、次項で見ると  
ように、佐野とは共にパリ万博に参加し、デュナン  
らに始まる草創期の赤十字活動を目の当たりにし  
ており、緒方洪庵・適塾の教育の先進性の一端を  
示す好例といえよう。

その後の佐野常民は、長崎で洋學塾を開設し、  
蘭学にとどまらず西洋の新しい知識の吸収に励ん  
でいた。また、藩主直正の命に従い、精煉方主任  
として佐賀藩の技術革新のプロデューサーとでも  
いうような役回りで活躍している（河村、1971）。  
また、長崎海軍伝習所での激しい修練をとおして  
海軍創設の下地となる活動を行っている。それら  
の活動の中で、「自由」ということばは佐野が翻  
訳考案したとされている（北島、1928）。往時の  
開明的な人物は、西洋の概念を導入するに当たっ  
て日本語に置き換える苦勞を語っている。例えば、  
福沢は「競争」という語を自ら創り出した苦勞に  
ついて語っている（松沢、2011）。言葉は、その  
背景に共有された概念が必要である。さまざまな  
西洋の知識や思想に触れるにつけ、それまでの我  
が国にはなかった「自由」という概念を新たに訳  
出し、それを一般のものとしていったとしたなら  
ば、「傷者は敵味方無く」という思想が、「博愛」  
の概念の下に、新たな視点で我が国社会にして受  
け入れられていく過程が佐野によって開かれて  
いったとみることもできる。

#### 4 洋行

幕府の呼びかけに応じて佐賀藩はパリ万国博への参加を決定し、慶応3（1867）年3月、佐野はその代表として長崎から出発した。46歳の折のことである。長崎での外国人との交流はさまざまに経験していたものの、蘭学、洋学を学んだ佐野の初めての海外経験であり、西洋諸国の実際を直に経験するという得難い体験をとおして佐野の世界が広げられていく様子が評伝などにみとれる（國、2013；三満、2012；吉川、2001）。なお、幕府は將軍慶喜の実弟、徳川昭武を代表とする派遣団を送り込んだが、昭武の奥詰医師として高松凌雲が同行している（日本史籍協会、2013）。

途中、香港に上陸し、西洋化された清国を目の当たりにした佐野は、半植民地化された清国の状況に大きな衝撃を受けたことが描かれている（國、2013）。清国は、儒学を国家の統治原理とする本家本元であり、その清国がアヘン戦争に端を發して、その後は列強に屈している状況は、我が国知識人の精神的支柱を崩壊させるに十分であり（菊浦、1981）、佐野も強い危機感を抱いたであろう。

パリ万国博会場では、赤十字に出会っている。イタリア統一戦争の際に目の当たりにしたソルフェリーノの丘の戦いを契機に、デュナンは人道に基づく救護組織を各国に作ることをモアニエらとともに提唱した（デュナン、2011）。その趣旨を各国に呼びかけた結果、万国博覧会に合わせて第一回国際赤十字国際会議が開催されると共に、博覧会場に赤十字館が設けられ啓蒙活動が始められていた（吉川、2001）。

外科医としての素養を背景に持つ佐野は、適塾での影響もあり、赤十字の活動が深く刻み込まれたと吉川（2001）は述べている。また、後年、「博愛社ノ主旨ハ人ノ至性ニ基ツクノ説」と題した明治15（1882）年の博愛社総会での講義の中で、パリ万国博の際の経験について触れ、負傷して武器を棄てたものは、もはや敵味方の別のないひとりの人間としてその生命を救うべきであるとも述べている（吉川、2001）。

パリ万国博後、佐野は渡欧の目的のひとつであつ

た軍艦建造の交渉のためオランダへ向かい、そこで「病院」、「貧院」、「老院」などの福祉施設見学を行ったことを吉川（2001）は紹介している。さらにヨーロッパ各国間の情勢や軍事事情を間近に観察するとともに、産業革命後のイギリスの国情も目の当たりにしたことが紹介されている（國、2013）。

佐野のパリ経験は、机上で学んだ洋書の知識が生きた知識となり（國、2013）、明治新政府にとっては貴重な人材として重用されていくこととなる。明治3年（1870）年、佐野は新政府に出仕し、兵部省小丞に任じられたのを皮切りに、明治政府での活躍を始めていく。またその年に「常民」と改名している。

明治4（1871）年、明治政府はウィーン万国博への参加を決定し、佐野を副総裁として派遣した。佐野の参加の目的は、日本産品の展示と共に、西洋文物の調査や外国技術の伝習を目的とするものであった（菊浦、1983）。ウィーン万国博では、赤十字展示館は開設されなかったが、すでに1864年にはジュネーブ条約が成立し、負傷兵の扱いについての条文も姿を見せており、各国の展示のなかから赤十字活動の拡がりを佐野は身をもって受けとめたことが窺われている（吉川、2011）。また、普仏戦争という直近の戦争における負傷者救護の実際についての見聞が大山巖によってもなされており（黒沢、2009）、政府と国民とが一体となった赤十字組織が創られている状況に佐野は注目したことが紹介されている（吉川、2001）。

往時を回顧した明治15年の博愛社社員総会における佐野の講義には、有名な以下の内容が述べられている。

「当時余は以為<sup>すべから</sup>く文明と云ひ開花といへば、人皆直に法律の完備、<sup>もし</sup>若くは器械の精良等を以て之を証憑となすと雖も、余は独り該社の此の如く<sup>たちま</sup>忽ち盛大に至りしを以て、之か証憑となさんとす」（佐野常民記念館、2001；吉川、2001 p.62より引用。片仮名はひらがなに改変）

また、佐野はこの渡欧中に、岩倉使節団がウィーン万国博を訪問した際にはその案内役を務めており、さらに使節団は、ジュネーブで負傷軍人救護国際委員会を訪ねた折にはモアイエらと面会しており（黒沢、2011）、佐野がそこに何らかの関与をしていたことも窺われる。

以上のように、万国博覧会への参加を中核とする洋行経験をとおして佐野は、勝者と敗者の姿を直接目の当たりし、倒幕から明治の世へと変革する日本の事情について強い影響を受けたことが指摘されている（菊浦、1983）。また、西欧の科学技術と先進的な農学に触れ、国づくりには一般社会の知識の普及が必須であり、そのための運動として効果があるのはモノをとおした博覧会である（松田、2007）として産業振興に向けた博覧会活動を指導するのみならず、そのカウンターパートともいえるべく、我が国社会の固有の美術文化の保護に向けて、竜池会を創設する（日本美術協会、1911）などの活動を進めていっている。

## 5 考察：思想と行動の背景を探る

### 1) 佐野の人格形成

「博愛社」設立に影響したことが想定される佐野常民の履歴を概括してきた。佐野常民の生家は、厳格な儒家であり、下級とはいえ佐賀藩の将来に向けた建て直しに実直に取り組む父と、その姿についての記述が佐野の評伝には見あたらないことから想像される、内助に勤しむ母親の姿が推測できる。父親充賛と母親から受け継いだ先天的な性格資質は、兄がそうであったように佐野常民にも受け継がれている。とりわけ、佐野を評した大隈や大給のコメントや、日本赤十字社による晩年の佐野の性格評（日本赤十字社、1910 他）によれば、佐野はいったん決めたことはテコでも譲らず、また自らの信念を貫くためには、相手が折れるまで何度でも説得しつづけたことが述べられている。これらの行動は少年期にはすでに現れており、弘道館の教育改革に向けた建議書を18歳にして提出し（北島、1928）、また万延元年（1860）、

39歳時には、「藩政一新、軍制改革」の大建議書を為し（西田、2005）、”國富んで兵強く、衣食足りて禮讓を知る”（本間、1943）ことなどを説いている。これらのことと、後の「博愛社設立願書」を提出するに至った信条と性格、行動は、偏に藩あるいは国の栄辱にこだわる（國、2013）、一貫した佐野の行動とみるができる。

ところで、近年の性格心理学は、生涯をとおして変化しにくい性格として、誠実性、親和性（協調性）、開放性、外向性、神経症傾向などをあげている（平石、2012）。また、性格の生得的背景についての近年の行動遺伝学による解析は、親から子へと受け継がれる行動特徴への新たな視点をもたらしている（遠藤、2005）。これらのことは、高齢期に向かうにつれ、ヒトは生得的背景に添う環境の選択的調整の度合いを強めていくことが想定できる。この視点から佐野の行動を考察すると、幼少期の行動が老齢期においてはさらに強まり強化されていったことが窺われる。

例えば、佐野の人物評には「誠実」な人格である旨の記述を多く認めることができる（北島、1928；日本赤十字社、1910）。それらは幼少期に於いてすでに生家、さらには養親へ、そしてさらには藩主鍋島直正へと仕える中で貫かれると共に、新政府に出仕してからは「国家」に向けてより強く発揮されていったとみるができる。

しかし、この行動傾向は、単に生得的な背景にだけ拠るものではないこともまた明らかである。それらの行動は、佐野が愛読した中庸、さらには四書五経をはじめとする儒学の大系から学び取ったことへの生涯をとおしての誠実な実行でもあった。ここに佐野の行動を創り上げた生得的背景と学習（修）的、経験的背景との両者の輻輳を見ることが出来る。

### 2) 「博愛社」創設をめぐる

では、佐野の思想の中で、「博愛」はいかに育まれ、変容していったのであろうか。金谷（1998）は、儒學（教）は一般に「修己治人」を説く教えとし、「大学」では、天下国家の政治もその根本



は一身の修養にあることが説かれていることを、また「中庸」では人間の本性とはなにかを論じ、「誠」の哲学が説かれていることを解説している。佐野は幼いころより儒学を深く学ぶのみならず、その教えを強く胸に秘めていたとみることができる。

例えば佐野は、明治15（1882）年の博愛社社員総会における有名な「博愛社ノ主旨ハ至性ニ基ヅク説」という講義の中で、「・・孟子曰ク今人乍チ孺子ノ将ニ井ニ入ラントスルヲ見レハ皆怵惕惻隠ノ心アリト・・」（日本赤十字社、1919；佐野常民記念館、2004）と述べ、パリ万国博覧会において見聞した赤十字活動を我が国に導入するにあたって、個人個人の「至性」に基づく儒教的風土を素地に「博愛社」を創設しようとしたことを語っている。

しかし、儒学における「博愛」は、先にも触れたように、統治の基本原理の一環をなすためのものでもあった。たとえば、儒学において「人道」とは、今日云うヒューマンイズム、人類愛とは一線が画されるものでもあった（日本赤十字社、1979）。すなわち、当時、人道とは「人の履むべき道、人倫、五倫」であり、個人道徳、修身と関連して自分自身が守るべき道であり、長幼、家族のような縦の関係における狭い意味の人道を指していると考えられるものであった（日本赤十字社、1979）。

実際、佐野と大給による「博愛社設立願書」のなかで“敵味方無く救護する”理由とは、①国恩に報いること、②人情、③天皇の赤子、④文明国としての規範の4つがあげられていた（黒沢、2011）。なかでも、「此ノ輩ノゴトキ大義ヲ誤リ王師ニ敵スト雖モ皇国ノ人民タリ、皇家ノ赤子タリ」（吉川、2001による）と記されているのは、敵兵救護という「博愛」をもって、国民感化の一方策ともなりうること（國、2013）が強調されたものだともみることができる。ただし、天皇を頂点とする新体制への恭順は、西南の役に遡る約10年前に、高松凌雲が函館病院での患者への説得においても「王政維新一視同仁の恵、病者を殺害するの

如きは決して為さざる可し」として、やはり韓愈の「原人」（笠松、1934）をはじめとする儒学思想に基づく恭順が説かれている（日本史籍協会、2013）。あるいは、薩摩軍を中心とした函館病院を撰取した新政府軍の側も、「是皇国の臣民なり」として高松凌雲の制止を受け入れたことが記録されている（同上）。したがって、近代化という大きな価値観変動の時代にあっても、我が国の精神風土として、儒学思想が人々を取り巻く歴史的、文化的背景をなすマクロシステムのなかに幅広く浸透していたとみることができる。またそれは見方を変えると、我が国社会を支配する母性的原理として今日に至っているとみられることもできる（河合、1976）。

### 3) 「博愛」をめぐる苦心

そのようななかで、赤十字活動に象徴化された近代国家形成に向けて、佐野は大きな苦心をしていたことをみて取ることができる。佐野は博愛社設立に向けた行動の動機を「文明開化」の証とすることを意図しているが、西洋に端を発した赤十字活動を我が国社会に導入し根付かせていくにあたっては、論理的な整理が必要であった。たとえば、小菅（2013）は、西洋における赤十字思想と人道の原則において基本となるのは“区別して保護する”という思想であることに対して、西南の役に際して佐野らによって敵兵救護の理由とされたのは、賊もまた「天皇陛下の赤子」という思想であったことを指摘している。すなわち、赤十字という戦時救護活動のもつ西洋的近代思想と活動を我が国に導入するに当たって佐野は、我が国に存在する固有の社会的、文化的事情を考慮しつつ、既存の用語や概念のなかにその思想や理念を流し込むことによって普及を図っていく必要があった（小菅、2013）。

それは、幕藩体制から明治維新へとつづく「非連続」を「連続」へとスムーズに移行させる試みであったとも見ることもできる（永井、1969）。とりわけ佐野は、佐賀藩という二重鎖国（杉谷、1992）のなかで儒学を修める傍ら、成長の中で蘭

学、洋学そして洋行、さらに維新という社会体制とそれに伴う精神的風土の変換を我が身の中ですべて経験した身であった。そのことは、福沢諭吉が少なくとも自らの内部においては早期から近代化が自らの思想、信条となっていた（永井、1969）状況とは異なるものがあったに相違ない。

佐野は我が国に根付いている概念を使いながら、近代化の象徴として「博愛」をキーワードに赤十字活動へと邁進していくことになる。それは、もくろみ通り、「明治日本が近代的な国民国家を形成し、人道援助という国際的な新しい潮流の一翼を担う『文明国』であることのきわめて大きな証」（黒沢、2013）という結果をもたらした。

しかし、矛盾も抱え込むこととなった。デュナンらによって提唱された赤十字の思想とは、基本的に「横に大きく広がる社会道徳、共存共栄的概念」（日本赤十字社、1979）である。一方、儒学に云う人道や博愛とは、「個人の道徳修養と関連して自分自身が守るべき道であり、長幼、家族のような縦の関係における狭い意味」（同上）を指すものであった。時代はルソーの「社会契約論」（ルソー、1954/1762）が中江兆民らによって我が国に紹介され、また民六社の活動に典型的に象徴されるように、自立した個による近代的社会の幕開けへの流れが加速していく状況でもあった。

その潮流を前に佐野は、「博愛」に込める意味を民衆自身の意識改革による相互互惠という横の拡がりへと転換することによって今日のヒューマニティへとつづく道を模索していたのではないだろうか。例えば、佐野は博愛社が認可された直後に、「華士族平民ヲ問フズ有志ハ汎ク入社ヲ許スヘシ」と社則の附則に加筆しており（佐久間、2012）、博愛社の活動を貴族中心から万民へと広げていくことを試みている。あるいは、先にも引用した「博愛社ノ主旨ハ人ノ至性ニ基クノ説」においても、幅広い民衆の至性に基づく活動を評価する旨の演説が行われている。

しかし、その一方で、佐野の思想と行動には、「博愛」や「人道」に込められた儒学思潮の名残

が色濃く残ってもいた。日本赤十字社發達史（日本赤十字社發達史發行所、1910）には、博愛社から赤十字社へと展開していくにあたっては、佐野が主導的役割を果たしたことが述べられている。そのようななかで、「報国恤兵<sup>じゆつべい</sup>は日本赤十字社の主旨にして、博愛慈善はその事業の精神なり」とされ、また、「博愛慈善一視同仁は大和民族の先天的品性にして人義の為に勇戦奮闘を辞せざる所以のものは帝国今日の大堤ある所以なり」として赤十字活動に国家主義的色彩が強められていく様相が述べられている。そこでは「報国」と「博愛」という相異なるベクトルについて、前者を経とし後者を緯とする活動として融合させる工夫がみられている。すなわち、「博愛」を横への拡がりとしつつも、その対価として国民には「報国」を義務づけるという縦の関係による統治という儒学思想の名残がそこには認められている。言い換えると、国民の抱くべき愛国心の発露と位置づけられる「報国恤兵」を「博愛慈善」と組み合わせる（cf. 小菅、2013）ことによって、東洋と西洋を融合しようとする試みがなされている。

欧化政策の一環として、国家レベルで取り組む活動へと赤十字活動を組織していった佐野は、列強に追いつき追い越せという、当時の先進的リーダーと時代精神を共有していた（國、2013）。それは、福沢をはじめとする当時の啓蒙家とは一線が画される方法ではあったが、博愛社から日本赤十字社へと発展していく過程は、我が国の近代化を象徴するひとつの「図」となったといえることができる。

### おわりに：「常民」として

「博愛社」設立に向けた佐野の思想と行動、そしてそれらの背景について考察してきた。親兄弟と分かち持つ生得的資質は、その後の経験のなかで洗練され、今日の人権や人類愛へとつながる普遍的価値を導く潮流のひとつを産み出していった。

そこには佐野自身のたゆまぬ努力もさることながら、その資質によって吸い寄せられるかのよう

に師事していった当代一流の学者の影響や、洋行に代表される得難い経験などが輻輳した結果であったということが出来る。行動遺伝学的な見方(遠藤、2005)を受け入れるとするならば、それらの経験は決して偶然ではなく、生得的資質に基づく必然的な選択の中で生じた結果であるということが出来る。

また、佐野自身を取り巻くさまざまな生態学的環境は、家族や弘道館を中心とした身近なレベルから幕藩鎖国体制に至るまで、儒学思潮を中核としたものから西洋列強を手本とした近代的体制へと、さまざまな変化がもたらされ始めていく時代であった。佐野は、自らの経験をふまえながら、開明的な視点でこの国の行方を見据え、そのビジョンにもとづいてたゆまぬ努力と行動力を示した人物であった(河村、1971;百瀬、1989)。時代の要請を受け止めうる資質がそこにはすでに培われていたことが窺われるとともに、佐野に代表される行動によって、新たな思想や概念が生まれ一般のものとなっていく過程をそこにみる事が出来る。

佐野が主旋律となって設立した「博愛社」は、さまざまな副旋律と共鳴しあって開花し、我が国が文明国としての評価を受ける一翼を担っていった。そこにはひとりの思想と行動が、時代の思潮と共鳴しあって発展していった様相が凝縮されている。儒学の性善思想を中核としながら、蘭学、洋学をはじめ新たな知識を得るのみならず、長崎伝習所をはじめとする技術研修をとおして近代を間近に経験したことは、西洋列強への強い対抗意識を産むとともに、我が国文化の相対化をもたらし、守るべき文化伝統への回帰へと向かわせてもいった。

これらの行動は、個人の思想や行動が、文化や歴史の中にはめ込まれていることを示す証左としてみる事が出来る。「博愛社」設立という行動は、佐野の生い立ちの中から産まれた必然的行動であり、また一方で、当時の社会がそれを必要とした必然の結果であろう。佐野の「博愛社」設立は、我が国の近代化に向けてのひとつの「図」と

なる一方で、博愛社設立が受け入れられたことに示される近代化に向けての当時の思潮は「地」としてその役割を果たしたということが出来る。例えば、柏原学爾をはじめとするパリ万博参加者が、福沢、西周らが主宰する民六雑誌への投稿を行っている(伴、1980)ことなどは、その一例であろう。また逆に、博愛社の設立や民六社をはじめとする各種の啓蒙活動が「地」となって、我が国の近代化は「図」としてその姿が浮かび上がってくる。まさに両者は「図」と「地」の関係として不即不離の関係にあると言えよう。

しかし、佐野自身が身につけた行動規範は、少年期に身につけた儒学の影響こそが最後まで色濃く残っていったのではないかも知られる。例えば、先にも見たように、「報国」と「博愛」は、必ずしも相容れるものではなく、さらに云えば、赤十字の理念である局外中立には、未だ途半ばの状況であった。それらは、明治新政府が欧化政策に向かう中で生じた避けられない課題のひとつではあれ、佐野自身は西洋的思想と東洋的思想との融合に向けて生じる必然的矛盾を、実際にはどのようにして解決しようとしていたのであろうか。

佐野は福沢とは対照的である。福沢は、青年期に至るまでに、すでに身分差別や、独立、平等など、近代を特色づける基本的態度を身につけていた(永井、1969)。福沢は父母両親の影響から身分制への憤りと平等を学び取った一方で、洋学をとおして自立した国家や個人の形成についての啓蒙を進め(福沢、1875、1876)、またそれらのなかから「一視同仁、四海兄弟の大義と報国忠恩、建国独立の大義とは相容れることなし」(福沢、1875、p. 21)として、宗教を基本とした統治への明確な反対を示している。とりわけ道徳と社会認識が未分化であるとして儒学の弊を激しく非難した。

また、福翁自伝「老余の半生」(松沢、2011)の中で福沢は、「一方に西洋文明の新事実を行い、他の一方には和漢の旧醜態を学ぶものと云わねばならぬ」と新政府高官の振る舞いの矛盾について批判を繰り返している。

これらの批判は必ずしも佐野に直接向けられた

ものではないが、明治の啓蒙家たちの視線の一端が冷徹に示されている。それらの批判とともに、おそらく自らが意識した東西の文化的疎隔（カルチャーギャップ）を克服していく方策として、佐野はどのようにそれに対処していったのであろうか。

佐野は、幼いころより親しみ、そして実践してきた「至誠」によって自らの行動を律しつづけることによって、思想と行動の整合をとり続けたのではあるまいか。佐野の人生は中庸に云う「誠」によって貫かれた。晩年に至って、佐野が各地の日赤支部を訪ねた際のエピソードが残されている。そこには、疲れた体を厭わず、訪ねてくるひとりひとりに丁重に対応する佐野の姿が描かれている（日本赤十字社發達史發行所、1910）。佐野は、最初は実親に、そして養親、藩主に、さらに国家に対して示してきた自らの「誠」を、最後は国民、民衆に対して自ら自身が「民」の一員となって示すことをとおして、自らが理想とした、民衆が自発的に支え合い「仁」を実践する「博愛」の社会の到来を夢見ていたように思われる。「仁」とは読んで字の如く「人が二人」関わり合う様を示している。そこでのかわりとは相互の慈しみであり、そこに人間普遍的の価値を見いだすことによって、思想と行動を貫きとおす「誠」の実践を遂行したのではないだろうか。明治3（1780）年、新政府に出仕すると共に自ら改名し、「常民」と名のつた（吉川、2001）ことにはそれらのことが象徴されているように感じられる。「常民」とは古典中国語においては「庶民」を意味しているからである（漢語大詞典編集委員会・漢語大詞典編纂所、1986）。

「和氣致祥」。佐野の最晩年の書という扁額（佐賀県立博物館、1992）は、その思いを伝えているかのようである。

【謝辞】 本稿をまとめるにあたり、山口県立大学国際文化学部・川口喜治教授に中国古典読解のご指導を頂きました。また佐野常民記念館の近藤真一郎氏には貴重なご助言をいただきました。記

して感謝の意を表します。

## 参考文献

- 伴 忠康 1980 高松凌雲と適塾 春秋社 1980  
中国哲學書電子化計劃 <http://ctext.org/zh>  
2013.5.8 閲覧
- デュナン、H.（木内利三郎訳）1862/2011 ソルフエリーノの思い出 日赤サービス
- 福岡 博 2005 佐賀の幕末八賢伝 出門堂
- 福沢諭吉 1875 文明論の概略 永井道雄（編）  
日本の名著 33「福沢諭吉」 中央公論社  
147-252
- 福沢諭吉 1876 学問のすすめ 永井道雄（編）  
日本の名著 33「福沢諭吉」 中央公論社  
49-146
- 平石賢二 パーソナリティ、高橋他編 發達科学入門3：青年期後期高齢期 東京大学出版会  
91-104
- 本間楽寛 1943 佐野常民傳 時代社
- 笠松彬雄 1929 精要唐宋八家文詳解 大同館書店
- 金谷 浩 1998 大学・中庸 岩波文庫
- 漢語大詞典編集委員会・漢語大詞典編纂所 1986  
漢語大詞典 上海辞書出版社
- 河合隼雄 1976 母性社会日本の病理 中公叢書  
川副町教育委員会編 1988 よみがえれ博愛精神  
佐野常民顕彰会
- 河村健太郎 1971 佐野常民伝 川副町
- 菊浦重雄 1981 佐賀藩の技術移転 佐野常民の事跡を中心に 経済論集（東洋大学経済研究会編）7(12), 29-72
- 菊浦重雄 1983 幕末・維新期の万国博覧会と「技術移転」桜美林エコノミクス 13, 1-29
- 北島磯舟 1928 佐野常民傳 野中萬太郎
- 小菅信子 2009 博愛社から日本赤十字へ 黒沢文貴・河合利彦（編）日本赤十字社と人道援助  
東京大学出版会 39-64
- 國 雄行 2013 佐野常民 佐賀偉人伝9 佐賀県立佐賀城本丸歴史館

- 黒沢文貴 2009 近代日本と赤十字 黒沢文貴・河合利彦(編) 日本赤十字社と人道援助 東京大学出版会 1-36
- Lerner,R.M. 2006 Developmental science, developmental systems, and contemporary theories of human development. In Lerner,R.M.(Ed.) Handbook of Child Psychology 6th ed. Vol.1 Willey, 1-17
- 松沢弘陽(校注) 2011 福翁自伝 新日本古典文学大系 明治編 10 福沢諭吉集 岩波書店
- 三満博之 2012 幕末パリ万国博使節派遣と佐野常民 國學院大學紀要 50、181-193
- 三島正英 2013 発達とはなにか 一新たな発達理解に向けての素描— 山口県立大学社会福祉学部紀要 19、1-14
- 百瀬明治 1989 適塾の研究 PHP 文庫
- 諸橋轍次 1986 大漢和辞典 大修館
- 永井道雄 1969 断絶の時代における飛躍 永井道雄(編) 日本の名著 33「福沢諭吉」中央公論社 5-47
- 奈良本辰也 1969 葉隠 日本の名著 17 中央公論社
- 日本美術協会編 1911 佐野伯演説集
- 日本赤十字社発達史発行所 1910 日本赤十字社発達史
- 日本赤十字社編纂 1912 日本赤十字社社長伯爵 佐野常民傳 岩崎駒太郎
- 日本赤十字社 1979 日本赤十字社百年史 人道その歩み 共同通信社
- 日本史籍協会編 2013 高松凌雲経歴談・函館戦争資料(復刻版) マツノ書店
- 西田みどり 2004 慶応3年パリ万国博覧会での佐賀藩 大正大学大学院論集 28、127-138
- 西田みどり 2005 安政年間の長崎における佐野常民、勝海舟、永持亨次郎の西洋に対する見方の比較研究 大正大学大学院論集 29、191-205
- 緒方富雄 1963 緒方洪庵伝(第2版) 岩波書店
- ルソー、J.(桑原武夫・前川貞次郎訳) 1762/1954 社会契約論 岩波文庫
- 佐賀県立博物館 1992 佐野常民展図録
- 佐久間 浩恵 2012 博愛社の創設と華族 日本女子大学大学院 文学研究科紀要 18、65-80
- 桜内義雄・坂本良太郎 1940 孝経・曾子 岩波文庫
- 佐野常民記念館 2004 佐野常民記念館常設展図録 佐野常民記念館
- 清水 茂 1956 唐宋八家文 朝日新聞社
- 杉谷 昭 1992 鍋島閑叟 中公新書
- 梅溪 昇 1996 緒方洪庵と適塾 大阪大学出版会
- 読売新聞社 明治紳士録(明治25年5月16日付) 読売新聞 CD-ROM 版
- 吉川龍子 2002 佐野常民と日本赤十字社 歴史学研究 81、97-104
- 吉川龍子 2001 日赤の創始者 佐野常民 吉川弘文館

## Tunetami SANO and "HAKUAI(Philanthropy)": Some Considerations on SANO`s Idea and Acts Including Develomental Psychological Viewpoints.

Masahide MISHIMA

In what way SANO Tunetami, founder of "HAKUAI(SHA(Association of Philanthropy)" and the Japanese Red Cross, began to form a "philanthropic spirit"? The primary purpose of this paper is to investigate the backgrounds that lead Sano to HAKUAI(SHA and the Japanese Red Cross Society by following his career. The first attempt was to consider the influence of such as the experience in his childhood, Confucianism, the Dutch and Western studies, and overseas travel. Those experiences clarified the background of Sano who had headed to HAKUAI(SHA and Red Cross Action towards the modernization of Japan. Next, the aspects, where acts and ideas of Sano are entangled in relationship with "Figure" and "Ground" in the new structure for the modernization of Meiji, were considered. Also, the concept "HAKUAI", which was employed to introduce Western idea of Red Cross activities into Japanese society by SANO, was investigated. Conclusively, I can point out that the action and thought of Sano was strongly influenced by Confucianism, and Sano himself continued to be a Confucian through his life.

Keywords: Tunetami SANO, philanthropy, Red Cross Activity, Confucianism, modernization